

列王記における病と癒しについて

南場良文

初めに

列王記は病気の記述で始まる。それは、ダビデ王が老化のために平常の体温を維持することが困難になったことを伝える。その対処法は、(現代人の目から見れば奇異ではあるが)若い女性の体温で王を暖めるというものであった(I列1:1-4)。この記事は、当時の人々が、健康(生命)と体温の間に密接な関連があり、健康な者から衰弱した者へ体温を移すことによってある程度生命を維持・強化できると考えていたことを示唆する¹。

旧約における同様の記事の検討は、当時病気がどのように理解されていたか、聖書においてこの問題がどのように扱われているかを知るために必要である。本論文では、特に列王記に限って、そこに見られる病(及び癒し)の記述を考察してみたい。

¹ ルートヴィヒ・ケーラー「ヘブライの人間」(日本キリスト教団出版局、1970)50頁。なお、預言者エリヤとエリシャがそれぞれ病死した子どもを生き返らせた記事からも、おそらく同様の思想を見て取ることができよう。I列17:21でエリヤは三度、死んだ子の上に身を伏せている。またII列4:34f.には、エリシャが死んだ子に体を密着させたり、室内を歩き回ったりした(自らの体温を上げようとしたと思われる)ことが記されている。

I. 病気に関する用語

列王記には、病気・癒しへの言及が約20件見られる。にもかかわらず、「病気とは何か」という問い合わせに対する直接の答えは見出すことができない。それ故、当時の病気の概念が現代におけるそれとどの程度合致するか、必ずしも明確とは言えない。ここではまず、病気に関する用語をいくつか取り上げることによって、列王記の「病気」の概念を考察する手がかりとしたい。

A. 病気を表わす語

旧約聖書において一般に「病気」を表すために用いられる語根は`הַלְכָה`(まれに`אַלְכָה`)である。この語根は旧約全体で110回²、列王記では20回³用いられている。`הַלְכָה`は「身体的な弱さの状態」を示す語で⁴、多くの場合「病気(である/になる)」と訳されるが、I列22:34、II列1:2、8:29では「負傷」、または「負傷に由来する病気」を指している⁵。

B. 健康を表わす語

`הַלְכָה`の直接の反対語は`רָכֶב`「強い、強くなる」である。イザヤ39:1には、ヒゼキヤ王が「病気だったが、元気になった」(`רָכֶב וְיָרַכֶּה` = 「弱

² 固有名詞として3回用いられている`לִלְכָה`を除く。

³ ただし、このうち3回は「動詞のPiel形+`וִיְנַחַת`」 = 「嘆願する」という意味の慣用句であるため、今回の考察の対象とはしない。

⁴ K. Seybold, “`הַלְכָה`,” in *Theological Dictionary of the Old Testament IV* (Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1980), p.402.

⁵ 列王記には用例がないが、「精神的な苦痛」や「(病的な要素のない)弱さ」を意味する場合もある。前者の例としてはIサムエル22:8「心を痛める」、雅歌2:5、5:8「愛に病んでいる」等が挙げられる。後者の例は士師記16:7, 11, 17で、サムソンが「弱くなる」事態に用いられる。この場合、サムソンは自分の持っていた大力を失って「並みの人のように」なったのであって、健康を害した訳ではない。

かったが、強くなった」という表現があり、旧約における病気と健康が「弱さ-強さ」というごく日常的、実際的な概念に基づいていることがわかる⁶。

より広い意味で **חַלָּה** に対立する語は **מְלָאָה** である。通常「平和」「平安」と訳されるこの語は、「健康であること」も含め、世界と人間の健全・完全・幸福と結びついた極めて積極的な概念を表す⁷。従って病気の存在は、**מְלָאָה** と相容れないものである。

C. 治癒・回復を表わす語

旧約で通常「癒す」を意味する語根 **אָנָּה** は、列王記においては 7 回用いられている（I 列 18:30、II 列 2:21, 22, 8:29, 9:15, 20:5, 8）。このうち I 列 18:30 では壊れた祭壇の「修復」、II 列 2:21, 22 では流産の原因とみなされた水の「浄化」、後の 4 回が病気・負傷の「癒し」に適用される。こうした例から、**אָנָּה** は基本的に「(本来的な状態に) 回復すること、直すこと」⁸を意味する語と考えられる。逆に言えば、病気は本来的な状態からの逸脱・下落であって、回復を必要とする状態なのである。

חַיָּה は「生命」を表す語根で、動詞形で「生き（てい）る」ことを表す。従って、死人が生き返ることを指すのにこの語が用いられる（I 列 17:22、II 列 8:1, 5, 13:21）のは当然であるが、死者ではなく病人についても適用される場合がある（II 列 1:2, 8:8, 9, 10, 14, 20:1, 7）⁹。これらの箇所では病気が死の危険を伴うもので、そこから「健康で充実した生」¹⁰が求められ

⁶ ただし、列王記では **רָאָה** が病気の反対語として用いられた例はなく、むしろ **וַיַּהַי חַלָּה מְאָד** 「病気が非常に『重く』なる」という表現が見られる（I 列 17:17）。

⁷ F.J. Stendebach, “**מְלָאָה**,” in *Theological Dictionary of the Old Testament XV* (Grand Rapids, MI: Eerdmans, 2006), p.19.

⁸ M. L. Brown, “**אָנָּה**,” in *Theological Dictionary of the Old Testament XIII* (Grand Rapids, MI: Eerdmans, 2004), p.596f.

⁹ **חַיָּה** のみで病気の治癒を意味する場合（II 列 8:10, 14, 20:1, 7）と、**חַיָּה מְחַלֵּה** 「病気から生きる」という表現が用いられる場合（1:2, 8:8, 9）がある。

¹⁰ H. Ringgren, “**חַיָּה**,” in *Theological Dictionary of the Old Testament IV* (Grand

たのである。ここには病気の持つ別の側面、すなわち生命力の減退と死の領域への接近という面が看取される。

D. 要約

以上の用語から、列王記（及び旧約）の病の概念は基本的に「身体的な弱さ」として理解される。それは日常的な「強さ」を失い、「平安」あるいは健全で幸福な生を失った状態である。それはまた、人間の本来的な状態からの下落であり、生命の衰えと死への傾きをもたらすものと言うことができる。

II. 病気の名称・症状

列王記における約 20 例の病気・負傷の報告の中で、10 例は具体的な病名を記さず、単に **חַלָּה** で表現している。このうちヒゼキヤ王の病気については、最初 **חַלָּה** とだけ記され、癒しの過程で「腫物」（を伴う病気）であったことが知らされる（II 列 20:1-7）。また、**חַלָּה אֶת רְגָלֵי** 「足の病気にかかる」（I 列 15:23）、**חַלָּה אֶת חַלְיָה אֲשֶׁר יִמְוֹת** 「死の病をわざらう」（II 列 13:14）等、病気の部位を表すか、その程度・深刻さを示す表現も見られるが、いずれにしても **חַלָּה** という一般的な表現で括られている。

特定の病気を示す言葉として特に目立つものは「ツアラアト」**תְּעַלָּאת** で、（動詞形を含め）10 回用いられている（II 列 5:1, 3, 6, 7, 11, 27 (2 回)、7:3, 8, 15:5）。それ以外は、「流産」**תְּלִכְשָׁמָה**¹¹ が 2 回（II 列 2:19, 21）、「盲目」については **מִרְאָה רְאָה**¹² が 2 回（II 列 6:18）・**רְאָה**¹³ が 1 回（II 列 25:7）、

Rapids, MI: Eerdmans, 1980), p.334.

¹¹ **לִכְשָׁמָה** の Piel 形「流産を引き起こす」の分詞。

¹² 文字通りには「目くらまし、ごまかし」の意。預言者エリシャが主に願ってアラムの軍勢を盲目にした記事に用いられている。

¹³ 旧約で通常「盲目」を表すのに用いられる語根。II 列 25:7 では、バビロン軍に捕えられたゼデキヤ王が（人為的に）「盲目」にされたことを指すのに、**רְאָה** の動詞形（Piel）が用いられている。

「疫病」**נָגָע**が1回（I列8:37）、「腫物」**נִפְלָע**が1回（II列20:7）と、比較的用例が少ない。

列王記の病気の記述はほとんどすべて¹⁴実際に起きた出来事を踏まえているにもかかわらず、病気の具体的な症状について記述している箇所は少ない。幾分でも症状について触れている箇所としては、I列1:1（ダビデ王の老化）、II列4:18-20（シェネムの女の息子の病気）、5:27（ゲハジのツアラアト）、20:7（ヒゼキヤ王の病気）が挙げられる。ただし、いずれも描写は簡潔で、I列1:1では老齢のため「夜着をいくら着せても暖まらなかった」、II列5:27ではツアラアトの症状として「雪のようになった」と一言記されているだけである。ヒゼキヤ王の病気についても、前述のとおりそれが「腫物」（を伴うもの）であったこと以外、詳しいことはわからない。列王記における病状の描写としては最も詳しいII列4:18-20にしても、シェネムの女の息子が屋外で頭痛を訴え、その日のうちに死んだことを伝える程度である。

以上のことから、列王記の病気の記述は多くの場合、「病気であった／病気になった」という事実を報告することに重点を置き、具体的な症状にはあまり関心を向けていないことがわかる。個々の病気を詳しく分析し、病気を分類・特定しようという積極的な試みはほとんど見られないである。

III. 病気の原因

病気の症状の分析や病名の特定に関する消極的态度は、個々の病気の原因解明においても影響を及ぼしている。すなわち、列王記においては、病気の原因が何であったのか、高齢（I列1:1, 14:4）や負傷（II列1:2, 8:28f.）は別として、ほとんど語られていない。

上記のような（言わば自明の）場合のほか、病の原因として挙げられているのは「水」である。ただ1例ではあるが、II列2:19でエリコの住民が、この町は「水が悪い」ので流産が起こると訴えているのがそれである。この

¹⁴ I列8:37「どんな病気の場合にも」のみが例外で、ここでは（祈りの中で）将来起こり得るすべての病気を想定している。

訴えに対してエリシャは、（通常の癒しと異なり）流産の危機にさらされた女性たちではなく、根本的な原因である水を「癒す」（または、あるべき状態に回復する）ことにより、問題を解決している。

IV. 病気と罪

ある場合には、罪が病気を引き起こす原因と考えられている。ソロモン王が神殿奉獻に際してささげた祈り（I列8:22-53）の中に、さまざまな災いが挙げられているが、その中の敗戦（33-34節）・旱魃（35-36節）・捕囚（46-53節）については、明確に、イスラエルが神に対して「罪を犯した」結果起こるものと想定されている（33, 35, 46節）。旱魃の記述の後に、「どんなわざわい、どんな病気の場合にも」（37節）という包括的な表現で病気が取り上げられており、文脈上、病気も罪が引き起こす災いの一つと見なされていると考えられる¹⁵。

罪に対する罰として病気（及び死）がもたらされるという思想は、ツアレファテの寡婦の場合にも見出される。彼女は、息子が病気のために死んだことについて、預言者エリヤを非難してこう言っている。「あなたは私の罪を思い知らせ、私の息子を死なせるために来られたのですか。」（I列17:18）。この言葉は、病気の原因に関する、当時の一般的な考え方を示すものであろう。

A. 罪が病気を引き起こしたと考えられる例

ただし、列王記における実際の病気に関し、罪が病の直接の原因と示唆されている箇所はあまり多くない。おそらく、罪と病の結びつきが最も明白な

¹⁵ たとえば Iain W. Provan, *1 and 2 Kings* (New International Biblical Commentary. Peabody, MA: Hendrickson, 1995), p.79; Paul R. House, *1, 2 Kings* (The New American Commentary. Nashville, TN: Broadman & Holman, 1995), p.145 を参照。

また、I列8章と共通する災いが見出される申命記28章において、神への不従順の罪に対する呪い・罰の一つとして病気が意識されていること（21f., 27f., 34f., 59-61節）も考慮すべきであろう。

例は、ヤロブアム1世の手の麻痺と、その子アビヤの病気及び死（I列14章）であろう。

ヤロブアム1世の麻痺（I列13:1-6）は、ベテルの祭壇での出来事である。この祭壇が将来ヨシヤ王によって穢されることを預言した「神の人」を、ヤロブアムが捕えさせようとしたところ、その腕が萎えてしまうのである。

麻痺の直接の原因は、神の人に対する不遜、また彼の告げた神の言葉に対する反抗の罪である。しかし、さらにその根底には、いわゆる「ヤロブアムの罪」がある。それは王が、中央聖所としてのエルサレム神殿¹⁶に対抗する政治的意図から、ベテルとダンに偶像を置いたことを指す（I列12:25-33）。この罪はヤロブアムの全家に及び、その滅亡を決定づけたのである（13:33f.）。

ヤロブアムの家の滅亡は、その子アビヤの病気と死（I列14:1-18）に始まる。従って、この出来事は独立したものではなく、13章で明確にされた王の罪と深く関わっている。この場合、アビヤの病気と死の原因は、彼自身の罪というより¹⁷ヤロブアムの罪であり、それは最終的にイスラエル北王国をも滅ぼすことになるのである（14:6-16）。

病気ではないが、明らかに罪の故に「傷を負って」（I列22:34。動詞הָלַךְが用いられている）死んだのがアハブ王である。彼は先にはアラムの王を逃がし、後にはナボテを殺して土地を取り上げたことで、自らの死とその家の滅亡とを決定した（20:42、21:17-24）。王であることを隠すために変装していたにもかかわらず、敵兵が「何げなく」放った矢によって致命傷を負ったという記述は、彼の戦死が神から出たことを物語る。

このほか、罪と病気の関係が疑われるるのは、イスラエル王アハズヤ及びヨラムの場合である。ただし、彼らがヤロブアムの罪に倣ったことは記されているが（I列22:52、II列3:3）、そのことと病気が直接関係あるかどうか

¹⁶ ソロモンがエルサレム神殿奉獻に際してささげた祈りによると、イスラエルが罪を犯して災いを被った場合、彼らが神に立ち返るための拠り所となるべきはこの神殿であった（I列8:33,35,38,48）。ヤロブアムの罪は、その拠り所を否定することによって、神に立ち返ることからイスラエルを遠ざけたことになる。

¹⁷ 「ヤロブアムの家で、彼は、イスラエルの神、主の御心にかなっていた…」（I列14:13）

は明らかではない。いずれにせよ、列王記は病気の原因よりも、彼らがその後死に至った過程の方に注目している。

ツアラアトに限って言えば、ゲハジの場合はエリシャの意図に背いて金品を得ようとしたことが原因である（II列5:26f.）。アザルヤ王については、「主が王を打たれた」（15:5）という記述から、何らかの罪が背景にあると想像されるが、それ以上の説明はない¹⁸。

B. 罪が病気の原因とは考えにくい例

以上、罪が病気の原因と考えられる、もしくはその可能性がある例を挙げてきたが、列王記には逆のケースも多い。先にツアレファテの寡婦の言葉（I列17:18）を挙げたが、それが当時の一般的な考えであったとしても、彼女の息子の場合にも適用されるかどうかは記されていない。

この寡婦も、同じような不幸に見舞われたシュネムの女（II列4章）も、預言者を神の人として受け入れ、厚遇し、その結果（食料の供給や不妊の解消といった）良い報いを得た女性である。それが一転して息子を病気で失うのであって、そこに「罪の報い」という要素を見出すことは困難である。

また、預言者であるアヒヤの盲目（または視力低下。I列14:4）や、エリシャの死の病（II列13:14-19）も、罪のためとは考えられない。前者は高齢のためであり、エリシャの病も老化に伴うものであった可能性がある。

さらに、敬虔なヒゼキヤ王の病気（II列20:1-11）についても、罪がその原因という説明は受け入れがたい。彼に死の告知をした預言者イザヤの言葉にも、罪に対する糾弾という要素は見られない。

¹⁸ ユダの君主たちに関して、歴代誌における並行箇所を参照すると、そこには「罪の報いとしての病」という概念が濃厚に見て取れる。アサの足の病気（II歴16:7-14）、ヨラムの「不治の病」（21:11-20）、上記のアザルヤ（ウジヤ）のツアラアト（26:16-23）は、すべて罪の報いとされている。これに対して列王記では、彼らの病気についての記述はごく簡潔である（I列15:23、II列15:5）か、或いは記述がなく（ヨラム王の場合。その事蹟はII列8:16-24参照）、罪が原因であることにも触れていない。